

神話的世界で抗い続ける

Artificial Line

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは神話が現実として存在する世界で、探索を続ける者たちの閑話。

COCTRPGで使っている自PCメインの小話。

目次

Test Pattern | 事前探索 |

S S D D | くそつたれな戦場にて |

1

S c o r c h e r | クチナシの香り |

8

I C a n S e e A l l | アリシア

という女 | | 13

T u r n i t A r o u n d | 巡り巡

る | | 19

I n t e r l u d e | 蝕まれる |

24

V i p e r | 毒の世界で泳ぐ | | 31

R a d i a t i o n | 汚染 | | 35

SSDD——くそつたれな戦場にて——

私は、会社員だ。

会社員と言っても、大抵の人が思いつくような書類仕事やデスクワークはあまりしない。
い。

私の業務は武器を持って戦うこと。

平たく言えば民間軍事会社のオペレーター。

このくそつたれの街は今日も雨だ。

窓ガラスを叩くこの雨を見ない日のほうがこの街では珍しい。

散発的な銃声も、誰かの悲鳴も、何もかもがただの日常の音として存在している。

ここはクリミア。ウクライナ南部に位置する黒海の要衝。

ロシアによる強行的な吸収とそれに対する反発。

ここは政治的にも経済的にも軍事的にも不安定で最悪な場所。

普通の企業なら一目散に逃げ出すような場所。

ただで私達の仕事はこういう地帯でこそ需要がある。

そもそもPMSCsはただの傭兵ではない。

提供する商品は軍事力、インフラ整備、軍事指導、警備。

戦争地域で必要とされているものをすべて提供するのが我々民間軍事会社だ。

私達はここクリミアで学校を建てている。

クライアントはクリミア共和国。

自称ロシア連邦の構成国の一つ。

他称しているのはロシアだけ。

まあこんなことはよくある話。

私達にとってはロシアだろうがウクライナだろうがどうでもいい。

大事なものは信用ができるかどうか。

その点に置いてこのクリミア共和国は十分に信用に値すると上は認めたのだろう。

武器を持って人を殺す我々が学校を建てていると考えると、自嘲めいた笑いが溢れて

しまった。

吸っていたタバコを投げ捨てる。

『こちらAngel Smileリーダー。LINKSリーダー聞こえるか?…おいア
リア』

ヘッドセットから男の声が流れる。

思考を中断し、応答を行う。

「聞こえてる。こちらLINKSリーダー。AngelSmileなにか問題か？オーバー」

『目的地点で搬入を行っていたAngelSmile2-2から応援要請。現地親ウクライナ派の武装勢力から攻撃を受けている模様。数は凡そ20。テクニカルも確認されている。50口径だぞ』

「了解した。LINKSのみで対処を行う。LINKSリーダーより全車。AngelSmile全車及びLINKS1-3、1-4は30秒後に停車。LINKS1-1、1-2は目標地点の安全確保の為急行する」

命令を下げば了解という声が次々に返ってくる。

子供達のための学び舎を建てようというのに、攻撃される。

こんなことは日常茶飯事だ。

どうやら人間は子どもたちの将来よりも戦争が好きらしい。

「さあ紅、飛ばして。さっさと行かないと連中全滅しちゃうわよ」

「了解。捕まっておけよ」

車列から黒塗りのアウディA8が2台離脱し、ぐんぐんとスピードを上げていく。

「さあTime to Attackだ」

アウディA8に増設されたサンルーフを開き、身を乗り出す。

手に持つのはM249MINIMI軽機関銃。

雨に打たれることも気にせず、私の口角は奇しく釣り上がった。

雨の中を飛び交う光弾を視認する。

目標地点まで凡そ600m。

林道の先で交戦は起きているらしい。

建設地は整地が行われており、林の中で唯一大々的に開けている場所だ。

敵勢力は建設地の西側、つまり私達と建設地の間90度に渡って展開しているようだ。

数台のテクニカルによる制圧射撃を行っているのがここからでも確認できる。

距離500m、400m、300m。250mを切った瞬間にインカムに向かって叫ぶ。

「LINKS各員攻撃開始。連中にたらふく鉛玉を喰わせてやりなさい」

MINIMIの引き金を弾く。

重い反動が方に伝わり、毎分800発の暴力的な初速をともなった鉛玉が標的へ向かって放たれた。

「ああ、そうだ。誤射はやめてよね。始末書かくの私なんだから」

こちらに気がついたようだがもう間に合わない。

標的が振り向く頃には鉛玉が頭蓋を砕き、ザク口を咲かした。

車両による高速移動中でも数撃ちや当たるとののだ。

「LINKSは標的の50m手前で停車。制圧射撃を持って釘付けにしろさい」

私の指示通り50m手前で2台とも停車し、総員降車する。

私の同僚であり運転手そして友人の蒼井紅は口笛を吹きながらMagpie MA SADAを単発で撃っている。

「残存目標8人。投降勧告を行う。総員射撃中止」

インカムにそうつぶやくと、一斉に射撃が止んだ。

眼の前で仲間が死んでいくさまを見ていた残りの敵兵はパニックになりながら、恐る車両の横から顔を出してくる。

「勧告を行う。武装解除し、投降するのであれば、我々はこれ以上の攻撃を行わない。我々はこれ以上の殺戮は望まない。武装解除し、投降しなさい」

拡声器を使って、敵兵たちへ勧告を行う。

しかし、それが聞き遂げられることはなかった。

仲間を殺され、激昂状態であった連中はテクニカルに取り付けてある重機関銃へと手をかけた。

溜息を付きながら、部隊へ殲滅指示を下そうとした時、空気を引き裂く回転翼の音が耳に届く。

空を見上げれば真っ黒なUH-60ブラックホークが3機上空でホバリングを行っていた。

ペイントされたエンブレムは我々Rayleona社社の社章。

「友軍機？」

そう呟いた瞬間、ブラックホークに取り付けられたドアガンが火を吹き始める。

M134ミニガンの毎分6000発放たれる大量の鉛玉の雨が残存していた敵兵に降り注ぎ、一瞬にして対象を沈黙させる。

口を開くよりも前にインカムからきれいな女の声が聞こえてきた。

『ハローアリスア、ベーにい。お邪魔だったかしら？』

聞き覚えのある声。

ああ。あの子なのね。

「あらアンリエッタ。いえ寧ろ仕事が減って助かったわ。これで私達がやるのはミニガンで耕された地面を整地するだけなもの」

「おい、アンリエッタ!!なんでお前ここにいんだよ!?!お前フランスでA国外務相の護衛してるはずだったろ！」

『キャンセルになっちゃったのよ。だからしばらくこっちで仕事。またあとでね』
アンリエッタがそう言うと、頭上のブラックホークは機首を翻し、飛び去っていく。
さあ。この陰鬱な街もしばらくは騒がしくなりそうだ。

Scorch er—クチナシの香り—

「おっと、すいません」

「こちらも。他所を見て歩いていたらわ。ごめんなさい」

街で一人の女とぶつかってしまった。

女はそう謝るとタバコを吸いながら歩いていく。

すれ違いざま、タバコの匂いに混じって花のような匂いが混じっていることに気がつく。

これはさつきの女の匂い？

「クチナシの香り？」

誰にいうでもなく、そう呟いた。

「どうしたルーキー」

前を歩いていた曹長が振り向いて声をかけてくる。

「ああいえすいません。あの人とぶつかってしまつて」

そう振り返りながらいうと、あの女の後ろ姿が目に入る。

長い藍色の髪をサイドテールにまとめ、所々にマゼンタのメッシュが入っている。

耳にはピアスがいくつもつけられており、さながらメタルが好きな女という風体。背にはスリングでKar98kの現代改修型だろうか？ボルトアクションライフルを下げている。

そこまではこのクリミアでは珍しくもない。

私の目を引いたのはその女の足だ。

まるでSFに登場する改造兵士のような義足。

メカメカしい金属製の義足は、パット見パラリンピックの1000m選手がつけている競技用のものに似ている。

「義足……？」

「ん？ああ……」

曹長は一息ついたあとに煙草に火をつけてから話し始める。

「ありやRayleonnardのアリシアだな」

「Rayleonnard？」

「ルーキーは聞かされていないのか？この辺の治安維持、インフラ整備を本国から請け負っているPMCだよ」

「ああ、聞いたことがあります。欧州第一位のPMCですよね」

曹長の口から紫煙が吐き出され、そうだと頷く。

「あいつはアリシア。Rayleonardクリミア復興特別対応課実働部隊Link
sの指揮官だよ」

「詳しいんですね曹長。ということは味方のPMCオペレーターですか」

曹長は少し苦笑いしながら続ける。

「ああ、ちよつと前に共同作戦があつた。まああとはうちの若い何人かがバカやらかしてな」

「ああ、確かに彼女美人でしたもんね。義足には驚きましたけど、それ除けばかなりの上物じゃないですか。とくにこの街じや貴重でしようし無理もないですね」

「何だルーキー。お前もアリシア狙つてんのか？」

曹長は意地悪く笑いながら尋ねてくる。

「別にそんなんじゃないですよ。客観的な意見を述べたまでです」

「そうか。まあ一応言っておくぞ。アリシアはやめておけ。あの女からは死人の匂いがする」

「死人の匂い？」

私は訊き返した。

「ああ。Rayleonardはな、女性オペレーターがそこそこいるんだ。あのアリシアもそうだし、あとはベニ・アオイとかいう日本人のオペレーターもいる。そこまで

はまあそんなこともあるだろうで片付けられるだろう？でもな、Rayleonnardの幾人かはヤバイんだ」

「ヤバイ？」

「ああ。さつきもいったベニってやつもあのアリシアもそのヤバイ奴らの一部だ」

言っている意味がよくわからない。

「ヤバイってどういう風にヤバイんです？とんでもない技術とか射撃の腕持ってるとか、早撃ちが得意とか？」

「もちろんそれもある。腕つぶしも強いし、銃の腕も一級品だ。だがな、本当にヤバイのはそこじゃない」

「あいづらな、人を殺す時笑ってやがるんだよ。それも笑顔って感じじゃないんだ。口角が釣り上がって、眉が下がる。なんていうかな。悪いことをやっていて、それが無事バレずに完遂できたときの笑みって言えばいいのか？とにかく普通じゃない」

笑っている。そう曹長が行った時、背筋に薄ら寒い汗が伝った。

「人を殺す時だけじゃない。戦場に入った時、自分がピンチな時。相手の頭に鉛玉ぶち込む時。いつでも笑ってやがる」

「俺はあのアリシアと何回か共に作戦を行った。そんなときにゾクリと冷や汗がでたよ」

「そりゃあ笑いながら人を殺せるやつなんて不気味ですよ」

「いやそうじゃない。あのアリシアっていう女は普段は機械か仮面のように無表情なんだ。誰と話していても、本を読んでいてもいつも無表情の仮面が張り付いてやがる。だ
がな、戦場に入った瞬間、ニヤリと。ゆっくりと笑い始めるんだ」

曹長の言葉の続きを待つ。

「あいつらは敵と認識した相手に容赦がない。レジスタンスも、正規兵も関係ない。少年兵も親を殺され悲しみで落ちていく武器を手にとった少女も関係ない。等しく笑いながら殺すんだ。作業みたいに。機械みたいに。胸に一発、頭に二発。きっちり撃ち込んでいく」

「俺は軍歴は長いが、アイツラのようにはなれないし、なりたくもない。俺たち軍人はあんな悪魔にはなつてはいけない。だからルーキー、気をつけろよ。アリシアに近づきすぎると、お前も死人に足を引かれるぞ」

I Can See All—アリシアという女—

オレの同僚は高嶺の花だ。

誰も手が届かない、高い崖の上に咲いたクチナシの花。

いろんなやつが彼女のことを死神だとか悪魔だとかいう。

そのどれも間違っではないと思う。

だがオレにとっての彼女は。

彼女は天使だ。

Rayle onard社クリミア駐屯部隊は3つに大別できる。

一つ目はインフラ整備、建設などを行う工兵部門。

二つ目は資源輸送、兵站、補給などを執り行う輸送部門。

三つ目はそれらの部門の護衛やクリミア内の警察活動、正規軍への軍事指導などを行う軍事部門。

オレは三つ目に所属する軍事オペレーター。

そしてこの部隊Linksの指揮官が彼女、悪魔、死神、天使なんて呼ばれているアリシア・レイレナードだ。

若干23歳の彼女だが、渡り歩いた戦場は数知れず。

13歳の頃から武器を手に取り戦い続けている。

レイレナードの姓からも分かる通り、彼女はこのRayleonnard社CEOの娘だ。

ではなぜそんな彼女がこのような戦争の世界を渡り歩いているのか。

具体的なことはよく知らない。

長い間彼女を見てきたが、表の理由はともかくとして精神的な理由はさっぱりわからない。

ただ一つ正確なのは彼女の家庭環境は最悪の一言につきるらしいということだけだ。

さて、なぜオレがこんなにも彼女について詳しいのか。

それは別にオレが彼女のストーリーカードからではない。

10年間共に戦場を渡り歩いてきたからだ。

最初に彼女と出会ったのはクロアチアで起きた人質事件だ。

彼女は人質となっていた。

ユーゴスラビア紛争、特にボスニア内戦に強く関与していたRayleonnard社に対する旧セルビア人グループによる報復だ。

もちろん彼女の父親には膨大な身代金が要求されたが、それに対して行われたのは人

質の命を危険に晒す可能性のある殲滅作戦だった。

当時その殲滅作戦に参加していたオレは、セルビア人民兵の死体を優しく抱き寄せて泣いているアリシアと出会った。

その姿は鮮烈的過ぎて、今でも脳裏に焼き付いている。

それからアリシアが家族の元に帰ることはなかった。

オレたちの部隊と共に世界を旅することを彼女は望んだ。

我々の上司、彼女の父親はそれを否定しなかった。

以来彼女は戦場の中に身を置き続けている。

一度聞いたことがある。

なぜ戦場に身をおくのかと。

「私は誰かの天使になれない。だけど、見つけたいものがあるからよ」

そう言っていた。

意味はよくわからない。

だが、何か目的があるのだと言うことはわかった。

オレに取ってはそれだけでよかった。

早朝。

この街の朝は暗い。

そして起きるときに決まって聞こえてくるのは雨が窓を叩く音。

そこまで雨の多い地域でも無いはずだが、長い間太陽を見ていない気がする。

寝床から起き出して、食堂へと向かう。

まだ飯の時間では無いが、コーヒーを飲むにはちょうどいい。

食堂に向かう途中、廊下を歩いていると誰かの息遣いが聞こえてくる。

トレーニングルームからだ。

覗いてみればアリシアがいた。

「やあアリシア。おはよう。コーヒー飲むか？」

「ハロークルセイダー。いただきわ」

彼女は汗をタオルで拭いながら、小さくハニカム。

「今日は冷えるぞ。あと服着なさい」

彼女は忘れていたと言わんばかりにブラだけの上半身にパーカーを羽織った。

「アリシア、またロシア正規兵と揉めただろ？」

「あんなの揉めたうちに入らないわよ。あいつら私の尻を触つたの。だから触り返した

だけ」

「義足で顎を蹴り上げるのは触るとは言いません」

アリシアはオレの前だと少し子供っぽくなる……らしい。
部下に言われて初めて気がついた。

アリシアはオレにとって娘でもあり妹でもあるような存在で、彼女にとってもオレは父であり兄のような存在なのだと思う。

「そういえば Y o u t u b e みたよ。椿ちゃんだっけ？まさかゲストでアリシアと紅が
でるなんておもってなかった」

「あの子に言いくるめられてね。まあ可愛い後輩のためだから」

「なるほどね。動画面白かったよ。コメント欄でも人気でたじゃんアリシアと紅。
フアンとかできるんじゃない？」

「人殺しだって知ったらそんなやつらいなくなるでしょ」

お互い同時に煙草に火をつける。

「来週から日本へ行くんだろ？」

「そう。極東部隊が4つも案件抱えているらしくて。人数が足りない分の極東、ユーラ
シア兵器運搬部門の商談の護衛」

コーヒーを口に運ぶ。

お互いにブラックだ。

「極東、ユーラシア兵器運搬部門ってことはレスタター・ビヤークネスの部隊か。というこ

とはオルレア嬢にも会えるんじゃないかい？」

「どうだろう。オルレアは昔のクライアントだけど、ここ数年直接あつてないわ。SN
Sでは連絡取り合っているけどね」

灰を落とす。

二人で一つの灰皿。

「紅も一緒に日本か？」

「そう。見知った腕利きが欲しいし、紅も日本に帰りたがってるのよ」

「じゃあこつちがむさ苦しくなるな」

「仕方ないでしょ。レスターには貸しを作っておきたいし、それにクルセイダーが残つてくれるなら私も安心できる。私のいない間の留守をお願い」

「おいおい。これでもお前よりはキャリアが長い。SAS舐めるな」

「元でしょ。コーヒーありがとう」

いつものサイドテールに髪を結び直し、彼女は出ていく。

10年でようやく、少し登れた気がする。

Turn it Around—巡り巡る—

高度1万メートル。

水平線の彼方に朝日が登り始めたのが見える時間帯。

横の席では紅が幸せそうに寝息を立てている。

ドイツ、アメリカを経由しての日本への空路。

民間機に乗るのは久しぶりだったが、ハイジャックなんてことも起きず平和な旅路だった。

朝日によって世界が照らされる。

ダークブルーの世界に朱色が侵食していく。

視界の端に街が見えてきた。

さあ、もうすぐだ。

「ん〜！久々だな日本」

紅が体をほぐしながらそうこぼす。

相変わらず人の多い国だ。

日本の人々の表情は私にとっては少し不気味に感じる。

来るたびにそう思う。

戦地の人々はその顔に絶望の色を浮かべることがあっても、生を投げ捨てる色は見せない。

みな必死に生きようとしている。

だけどここの国の人間は違う。

なんというか、人生の優先順位が狂っている気がするのだ。

「遊ぶのは仕事の後よ。しつかりこなしてよね」

「わかってるよアリシア。さあ、とりあえず神奈川に行って仕事道具を受け取ろう。3番に迎えの車が来てるってよ」

PDAを確認しながら彼女はそういった。

「やあアリシア。元気かい？僕の方は東南アジアエリアの売上が芳しくなくてねえ」

久しぶりに顔を合わせたこの白髪の方は、顔に笑みを貼り付けながら手を振っている。

神奈川で装備を受け取った後、今回の護衛対象であるレスター・ビヤークネスと合流した。

レスターは昔のクライアントのオルレアの実兄だ。

何度か仕事をしたこともある。

「ハロー、レスター。お久しぶりね」

「ああ久しぶり。紅も久しぶりだね。ウラジオストックでの仕事以来だっけ？」

「こんにちはレスター。おひさ。もうそんなに会ってなかったっけ？」

しばし軽く談笑をする。

彼の部隊とは全員顔見知りだ。

「東南アジアのそれってOmerの仕業？」

「そうだよ。もう連中が最近出ずっぱりで邪魔してきてさ。今回君らをわざわざ呼んだのもその件なんだよ」

「ああ、なるほど。それにしたって私達をヨーロッパから呼びだすのは大げさなんじゃないの？ 私達よりも腕が立つ連中なんて極東、ユーラシアにはゴロゴロいるでしょ。そういうえばカインの姿が無いけど」

「親父さんは中央アジアで作戦中だよ。最近入り込んできたロシア系の武器商人が派手にやっててさ。ちよつとお灸を添えに行ってもらってる」

彼はガムを口に放り込んでから言葉が続ける。

「今回紅とアジアに来てもらったのは大げさでもなんでもないよ。今回の交渉相手はOmerの中央アジア、東南アジア輸送部隊。つまりユデイスちゃんのいる部隊だ。知

り合いが双方に居たほうが話がスムーズに進むだろ」

「ああ、なるほど」

「ユデイスかく。イギリスであったA国のUAVトライアル以来だな。あいついるってなるとネゴシエーターは…」

「ああ。アルゼブラだよ。君たち二人彼に気に入られているだろ？」

溜息を付きながら煙草に火をつける。

今回の仕事は懐かしい顔を一気に見ることになりそうだ。

アルゼブラ。

Omer Science Technology社に所属する武器商人。

Omerの中央アジアから東南アジア武器輸送ルートを取り仕切る人物で、頭が切れる。

壮年の男であり、元ノルウェー猟兵中隊中隊長。

ユデイス。

同Omerに所属する軍事オペレーター。

アルゼブラの部下で、若年の女。

戦争のすべてをそつなくこなす。対人格闘、狙撃、指揮、運転、操縦。

通称ワンマンスクワッド。

元ポーランド急対応作戦グループGROM所属。

主にアジアで対立するOmerとRayleonardだが、時には共同作戦を展開する場合もある。

それは大規模な神話的事象に対し、正規軍が行動を起こさないときにだ。

久々の旧友との再開に備えて、私は煙を吐き出した。

Interlude—蝕まれる—

私達の世界はくそつたれだ。

先進国の人々は欺瞞の平和を応需し、第三世界の人々が割を喰う。

いや、先進国の人々だってその日生きるのが精一杯の人もいるだろう。社会が発展した代償に新たな苦しみに苛まれてる人もいる。

だがそれでも。

少なくともいつ頭の上に爆弾が降ってくるのかを心配する必要はない。

いつ壁を銃弾が貫いてくるのか怯えることはない。

私には、それがひどく幸せなことだと思える。

私の生まれは極東の島国、日本だ。

さきの世界大戦で荒廃したこの国も、今では世界で有数の経済大国。

治安の良さは折り紙つき。

生きる人々の多くが命の危機に貧することもない、平和な国家。

だけど。私はこの国を好きにはなれない。

なんというか、不気味なのだ。

生きるために皆仕事をする。

それは至極当然だ。

だけど。この国ではそれが逆転してしまっているような気がするのだ。

昔、家を飛び出して知識欲のままに世界を旅した長姉の気持ちも今ならわかる気がする。

きつと彼女にとってこの国は窮屈だったのだ。

私も姉と同じく、家族を残してこの国を出た。

大学在学中、幾度となく米国の射撃場へと足を運んだ。

射撃と旅行は私にとっての趣味。

アニメを見るとか、プラモデルを作るとか、そういうのと同じ。

大学の語学は英語を専攻していたし、何より先輩の教え方がとてもうまかったので英語圏で困ることはなかった。

海外旅行で最大のネックは何かと問われると、80%の人は言語だと答えるらしい。

その点で言えば私の海外へ出るハードルなど微々たるものだった。

あの背の小さい白髪の前輩には感謝している。

まあとにかく私もは良く米国の射撃場で銃を撃っていた。

ハンドガン、ライフル、ボルトアクションライフル、ショットガン、撃てるものはな

んでも撃った。

別にその時は明確な目的があったわけじゃない。

ただ、サッカーをするとかバスケをやるとか、ゲームで遊ぶとか。

私にとってはそれと同じ感覚だった。

何度も足を運ぶうちに顔見知りも多くなってきた。

たまたま会ったアメリカ陸軍の伍長とか、元SEALsのインストラクターのおつきんとか。

彼らにとつては日本人の小娘が良く来ていることが珍しかったらしい。

私は行くたびに射撃を彼らに教えてもらった。

今思い返せば、ただで世界有数の特殊部隊の元隊員から教えてもらうなどとてもない幸運に見舞われたのだと感じる。

彼らに教えてもらったのは射撃だけではない。

誘われて格闘術の練習会にも参加させてもらった。

これも特に明確な目的があったわけじゃなくて、幼い頃からやっていた空手の延長線上のつもりでやっていた。

まあ有り体に言えば射撃も格闘も好きなのだ。

アニメや漫画が好きですというのと同じ。それだけ。

さて、そんな私だがそれを実際に使う機会が訪れてしまった。

大学の卒業旅行で滞在していたフランスのパリ。

そこで私はISISのテロに巻き込まれた。

友人と見に行つたオペラ劇場。

突如としてホール内に銃撃が鳴り響き、一瞬にして地獄と化したのだ。

人質として囚われ、最悪の状況だったが、一つだけ幸運なことがあった。

偶然にも人質の中に元英国SAS隊員が混じっていたのだ。

拘束三日目。

元SAS隊員、クルセイダーが主軸となり見張り役だったISISの兵士を奇襲し反

抗を開始した。

反抗といつても実態は逃走劇。

人質を開放することを最大目標とした撤退戦。

本来であれば動かぬことが最善なのだろうが、ISISがフランス政府に行った要求がとて通るものには思えなかったのだ。

GINの現指揮官の処刑と政治犯の開放、中東地域からの即時撤退など飲めるはずもない。

それに——最初の襲撃の時点で友人は死んでしまっていたから。

私とクルセイダーが殿を努め、劇場からの脱出は成功した。

二人で殺したI S I Sの兵士の数は23人。

不思議と、人を殺すことへの忌避感はなかった。

それは友人を殺された事による復讐心からなのか、いまでもわからない。

実戦はド素人といえども、私に技術を叩き込んだのはもとアメリカ海軍特殊部隊N A

V Y S E A L Sの隊員。

その時、実戦を経験したことのないが、世界最高レベルの師匠に教え込まれた私と、実戦だけを経験している民兵との技術格差を実感した。

フランス政府からは感謝状を送られ、メディアは英雄と称える。

フランス当局に保護される直前、元S A S隊員で私と共に銃を手にとったクルセイダーという男が名刺を渡してきた。

『もし、君が望むのであればそこへ連絡してくれ』

そう言って。

名刺には『Rayle onard』という社名と彼のコールサインである『C r u s a d e r』の文字。

それにQRコードと電話番号が記されていた。

その時には意味がよくわからなかった。

どういふ会社なのかも彼は伝えなかつたし、なぜそんなことを言うのかも理解し得なかつた。

結局、私は日本に戻つた直後にそこへ連絡した。

大学に戻つた私を待つていたのは、圧倒的な孤独だつた。

誰もが私を恐れた目で見ると。

誰もが私を忌避する目で見ると。

その時にわかつたのだ。

クルセイダーがああいった理由が。

私はもう元の世界には戻れないのだと。

家族は味方してくれた。

紅は何も悪くないよ。私達は知っているよ。そう言つてくれた。

大学でも唯一一人だけ態度を変えずに居てくれた人が居た。

白髪の小さくて可愛らしい、でも凄いいの強い先輩。

——正直紅が何をしようが、何をやつてようがどうでもいいのよ。私にとっては可愛い後輩。私は私と弟に害を為さない限り、紅の味方よ。

少ないながらもそう言つてくれた人たちが居たおかげで、私は救われた。

だから。今までの日常と決別する決意ができたのだ。

それからクルセイダーの推薦で入社試験を受け、Rayle onardに入社した。アリシアと出会い、仲間と出会い、戦場を渡り歩き、神話的事象を喰い破って今に至る。

私は蒼井紅。

数少ない日本人女性の民間軍事会社オペレーターとして、戦場を闊歩する戦争屋だ。

V i p e r — 毒の世界で泳ぐ —

今回東欧から呼び寄せた二人の女性オペレーター。

アリシア・レイレナードと蒼井紅。

僕にとって彼女たちはただの一兵士では無い。

戦闘力に関しては彼女たちよりも強いものは五万といるだろう。

知識に関しても彼女たちよりも優れたものは無数に存在しているだろう。

だが彼女達はこの世界の多くが持っているものを持ち合わせている。

それは彼女たちの精神性だ。

この世界に潜む真実、本当の姿。

それらと真つ向から対峙し、突き進み打ち砕く稀有な精神性を有している。

恐れないわけではない。驚かないわけでもない。納得するでもない。

だが決して歩みをやめるわけではない。逃げ出すわけではない。

彼女達はこの世界の真実を知り、それでも歩みを止めない探索者だ。

僕にとって彼女たちはただの一兵士では無い。

彼女たちは世界の真実にすら喧嘩を売れる大馬鹿野郎であり、どんな状況でも信用で

きる数少ない人間なのだ。

もちろん僕の部隊だつて信用はしてるけどね。

僕たちはみなどみらいに向かつて車を走らせている。

運転手は紅。

助手席にアリシアが座り、後席に僕、レスター・ビヤークネスと僕の部下が座つてい
る。

「なあアリシア〜」

「何よレスター。猫なで声なんかだして。怖いんだけど」

「ひどいなあ。オルレアが最近冷たいんだよ。『兄さんは私よりも仕事が大切なので
しょう』とかつつけんどんなんだ。女性の機嫌を治すいい方法なんか無いかい？」

適当に話題を振る。

僕の信条は仕事前は極限までリラックスだ。

「そういうのを他人に聞いちやうからオルレアは怒るのよ。私も人のこと言えたこと
じゃないけど、貴方どうせ妹にすら自分の本心さらさないでしょ。そういうところ直
したら」

「これは手厳しい」

笑いを顔に張り付けながら、頭を軽く搔く。

「紅んところ姉妹仲いいだろ〜？なんかアドバイスとかちようだいよ」

「直す気はないのね」

アリシアが顔を振り向かせジト目で見てきた。

こういうときはなあなあなスルーに限る。

紅は吸っていた煙草を灰皿に置いた後、口を開いた。

「ん〜。私のところは昔からずっと姉妹仲はいいからなく。さっきアリシアも言ったけど本心をさらけ出してくれない兄にちよつと思うところあるんじゃない？私の家は迷ったらすぐ相談だったよ」

「フーフ。いたいけで可愛い妹には刺激の強い話ばかりだからなく。そもそも僕は常に本心をさらけ出してるよ。誰もそれを疑って裏があるんじゃないかと勘ぐるだけさ」
「貴方のその鉄仮面のせいでしょう。本心と思わせる気がないならなにも意味が無いじゃないの」

「僕は武器商人だよ？仮面無しで交渉事に挑むのは、君たちが銃を持たずに戦場に立つのと同義だよ」

「オルレアとなんの交渉をするっていうのよ…」

「フーフ。人生はすべて交渉事と選択の連続さ」

トンネルを抜ける。

さあ、もうすぐ今日の戦場に到着だ。

Radiation—汚染—

車から降り、指定された場所へと向かう。

海が見えるテラス。

寒いが快晴の上、休日なこともありそれなり以上の人で賑わっている。

レスターはいつものスーツ姿。私達オペレーターはRayleonard社軍事部門の礼服を身に着けている。

真つ黒なコートに赤いラインが走るそれは、軍隊の礼服とよく似ている。

こういうところがRayleonardが他のPMCと比べて軍隊的だと言われる所以だろう。

本来Rayleonardは民間軍事事業よりも運送とエネルギー分野がメインなのだが、

まあそれらは密接に結びつくものであるし、業界の人間の多くは複合軍需企業として認識してらるだろう。

テラスに出ればすぐにOmerの面々が目に入った。

これだけ人で賑わっていても、屈強な外国人が何人もいれば浮くものだ。

まあ私達は彼らの比ではなく浮いているが。

アルゼブラ、ユデイス、その他に3名の姿が確認できる。

アルゼブラは白いジャケットに青いシャツ、黒のスラックスという比較的フォーマルな格好。

ユデイスはいつもどおりの白シャツにアクセサリーに見せかけた手甲。

タイトスカートという出で立ち。

私達の姿を確認したアルゼブラが手を振りながら声をかけてくる。

「やあMrレスター。お久しぶりです」

「お久しぶりですMrアルゼブラ。アフガニスタンでの兵站トライアル以来ですね」

お互いに握手する。

ユデイスはその奥で微笑みながら私と紅に手を小さく振ってきた。

手を上げてそれに答える。

「さて、早速ですが仕事の話しましょう」

「ええ。御社、Rayleonnard社から送られてきた内容は読ませていただきました。東南アジアルート分割案ですか。『両社の対立のすきを付かれ、第三社の介入を許すのが互いにとって最も不利益。であれば明確な分割を行い、より良い競争関係を築きましょう』要約するところですか。正直少し驚きました。Rayleonnar

dであれば実力で我々を排除することも可能でしょうに」

アルゼブラは口元に笑みを作りながら、しかし全く笑っていない目のままそういった。

それに対するレスターもいつもの笑顔の仮面を貼り付けたまま答える。

「いやいや。我々は企業です。帝国主義時代の国家ではありませんよ。まあ正直な所、Rayleonnardが独占してしまつては他社から疎まれるのは明確です。それはそちらも同じところでしょう？我々の対立はお互いにとつて不利益しか生みません」

レスターは笑顔のまま、そう言い切る。

だがその目はこれっぽっちも笑っていない。

紅はこういう場が退屈なようで、かもめを見ながらコーヒーを啜っていた。

「確かにMrレスターの言う通りです。この提案は我々にとつては非常にありがたいものです。ですが……」

皺の深く刻まれた眉間にさらに深い皺を刻みながらアルゼブラは続ける。

「分割ルートが5：5なのはいつたいたいということなのでしょう。これまでの東南アジアルートの占有度合いは3：7。あなた方にとつては不利益なのでは？」

フーフとレスターが笑いながら言葉を返していく。

表情は相変わらずの笑み。

味方でありながら掴みどころがないとしか言いようがない。

「Omerからの妨害がある3:7よりも不可侵条約を結んだ上での5:5の方が利益があるだけですよ——まあもちろんそれだけではありませんが」

レスター口角を釣り上げ、ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「そうこなくては——」

アルゼブラの表情も優しい叔父様といった雰囲気から一転、邪悪という言葉がこれほど異常に似合うものは無いというほどの笑みを浮かべた。

なんで交渉難度が上がったほうが楽しそうなのだろうか…。

「東南アジアエリア南東に位置するC共和国。その地方都市の一つが2週間前に音信不通になりました。現地政府がクーデターを危惧し、諜報員を派遣しましたが72時間以内に連絡は無し。それに対し、政府は箝口令を発令。情報統制下で陸軍一個中隊を派遣。だが部隊は意味不明な絶叫を送信してきた後に連絡が途絶。事態を重く見た政府は、国軍にこれ以上の損害が出ることを恐れ、我々に依頼を行ってきたのです」

「なるほど。我々に東南アジアルートの一部を譲る代わりに、それを手伝えと。しかし何故です。御社のアジア展開戦力であれば地方都市の一つ程度手こずることもないでしょう」

わかつていくくせに。そう目では返しつつも、レスターは言葉として説明する。

如何に腹が読めようとも、言葉にしなくては存在していないのと同義だ。それをレスターもアルゼブラも重々に理解している。

「他のアジア地域を空っぽにするわけにはいきませんよ。それにこの作戦にはただの兵士は使えません。C共和国政府とRayleonnardに密接なつながりはありませんでした。では何故彼らが我々に依頼を行ってきたのか——米国デルタグリーンの仲介があつたからです」

その場にいる”わかつている”者たちの目が変わる。

私も、紅も、ユデイスも、他の一部オペレーターも。

「……神話的存在の関与が疑われると?」

「ええ。デルタグリーンの話ではまず間違いなく黒だと。カロテキアという旧ナチスSの残党のメンバー数名が現地入りしたのを確認しているようです」

アルゼブラは顎を抑えてしばし考える。

ユデイスと紅に目を向けてみれば、先程までの表情はどこへやら。

鋭い目つきへと変貌していた。

「わかりました。本社へと連絡しましょう。契約成立です」

「そういつていただけると信じてましたMrアルゼブラ。ではこちらにサインを。作戦につきましては明後日の1900詳しい話をお願いしますが、いかがでしょう」

「構いません。ではこれにて。少々忙しくなりそうなので」

「わかりました。Mrアルゼブラ、今回はありがとうございました。お気をつけて」
「そちらも、Mrレスター。ではまた後日」

ユデイスに目礼で挨拶を送る。

Omerの面々が完全に見えなくなつてから、煙草に火をつけた。

予想以上に厄介な事態に巻き込まれることになりそうだ。

「さあ！というこゝで紅！アリシア！手伝つてもらおうよ！大丈夫！もう口座には報酬を振り込んでおいたよ！」

「それつて選択権は無いつてことじゃない！（じゃねーか！）」

紅と勢いよく声が被つた。

全くこのレスターという男は。

だが神話がこの表世界に侵食することを見逃す訳に行かない。
信用しているくせに試すような真似をする。

だからオルレアに怒られるのよ。その言葉は胸にしまい込み、今後の予定について話を開始した。

Test Pattern—事前探索—

あれから場所を移し、現在地は東京都内。

帝国ホテルのスイートルームにて。

私達は作戦に向けての打ち合わせを行っていた。

「で、どのくらい敵勢力が展開してるのさ。それがわかんないことにはこっちも抽出する戦力が決められないぞ」

紅の問いかけに対して、レスターはシャンパンをあおってから口を開く。

時刻は1800。冬の日本はとうに日が沈む時間。

窓の外には眠らない街東京の夜景が広がっており、光量様々な光が月明かりを隠す勢いで輝いている。

「それがね…」

「それが…?」

「…」

ゆつくりと、ゆつくりと溜めた後に、彼は言葉を続けた。

「さっぱりわかんないんだよねー!」

擬音が付きそうな勢いで紅が椅子から転がる。

あの娘、そういう古典的なギャグもできるのね。

「ふっぎけん！敵戦力の推測も観測もできねえのに作戦つておめえ馬鹿野郎！」

紅が叫びながらレスターの胸倉を掴みブンブンと揺すった。

アツハツハーと脳天気に笑う彼だが、相変わらずその目だけは笑っていない。

「依頼が入った直後にUAVを飛ばして偵察活動は行つたんだよ？でも40mはある大きな怪鳥？かな。とにかくデカくて空飛ぶ化物が迫ってきて撃墜されちゃつたんだよ。いやーあれには驚いたね。ちょっと正気度が減つた気がするよ」

「んな呑気な…まあ少なくともUAVが飛ぶ高度まで上がつてこれる飛行型の神話生物がいるってことか。ならヘリボーンは危険だな」

「そうね。私の知識ではそんな大きな飛行型神話生物は思い当たらないわね。デルタグリーンに情報提供してもらつたら？」

紫煙を吐き出しながら、私はそういった。

少なくとも今まで体験してきた神話的事象で目にしたことはない。

「デルタグリーンにはもちろん要請したよ？なんでもシャンタク鳥とか呼ばれている化物らしい。生身で到底敵うスペックでは無いね。資料はこれ」

渡された資料に目を通す。

そこに添付されていた写真を見て、大分不快な気持ちになった。

こいつら神話的存在を見るたびに、精神が摩耗する気がする。

だが写真を見て思い出した。

この化物、前に椿が話していた気がする。

「…思い出した。この化物、椿が以前遭遇したって言ってたわ」

私がそう言葉を紡ぐと、二人の顔が一気に真剣なものとなる。

「マジか…？椿美人な癖にやっぱりヤバイヤマ超えてるなあ」

「実際に邂逅した人物がいるならその椿ちゃんに聞くのが一番じゃないかな。資料はあくまで資料。文面だけじゃわからないことの方が多いしね」

私は肯定の意を示し、SNSを起動して椿に連絡を送ろうとする。

だがその前に紅が続けた。

「あー。椿に話聞くならついでにもうひとり呼んでもいいか？私の大学時代の先輩なんだが、こういう事態をいくつも乗り越えて阻止してきた人がいるんだ」

今度は私とレスターがええ…という表情をする。

「どんだけ私達の周り非日常に慣れている人多いのよ。」

「えつとまあ、僕はいいと思う。情報は大いに越したことは無いしね。だけど民間人だろ？いいのかい巻き込んで」

「それを言ったら私達も国際法上では民間人だろ。問題ないと思う。というか彼女以上にこういうのに詳しい人は知らな…ああいや一人いたわ」

紅がそう言つてこちらをチラツと見た。

私は少しバツが悪くなり、そっぽを向いてしまう。

彼女は私の姉、アリーヤ・レイレナードのことを言っているのだ。

「…まあいいや。とにかく私もその人に連絡してみるよ。で、話を戻すがとりあえず空路は無しだな。被害が拡大すれば隠蔽も難しくなる」

「そうね。それに航空戦力の減少は私達にとつても大きな痛手よ。となると取れるのは…」

「海路と陸路になるわけだね。件の都市は海にも面している港町だ。海路も十分に可能だよ」

レスターの言葉を聞いて、しばし考え込む。

海路は大規模な兵力を運ぶのに最適だが、海では逃げ場がまったくくない。

船が潰されればそれで終わりだ。

「…陸路がいいと思うわ。こういうときの海つてたいい確なことが起きないから」

「私もアリシアに賛成だ。撤退ルート構築、現地の偵察、驚異の排除。これらを行うのであれば最初から車両のほうがやりやすい」

「了解した。では陸路で。次に部隊編成だ。相手の規模がわからない以上、最大戦力を持つて撃滅したい所ではあるが、部隊が大きくなればなるほど隠蔽工作の難度は跳ね上がる。それに全員を使うわけにも行かない。だから…」

「送れる部隊は精々二個小隊規模だな。RayleonardとOmerでそれぞれ一部隊ずつが限界じゃないか？」

「そうね…。正直街一つを相手にする可能性もあることを考えると、全然足りないわ」
三人で考え込む。

先にも言ったとおり、全く戦力が足りない。

そもそも神話的事象に対処できる者たちだけで部隊を組めば、Rayleonard極東、ユーラシア戦力では精々三個小隊が限界である。

そのすべてのものを動員するのは、他の地域で神話的事象が起きた場合に致命的な混乱が生じる可能性があるので論外だ。

だからこそ私達が呼ばれたわけでもあって。Omerに協力要請をしたわけでもあって。

「うーん…通常部隊の動員ができればなあ…」

「無茶を言っちゃいけない。神話を知らない連中が何人来ても烏合の衆になるのがオチ」
「や」

さて困った、と皆が頭を抱える。

しばらく唸った後に、大事なことを聞くことを忘れているのを思い出した。

「そういけばなのだけど。この作戦の指揮官は誰になるの？」

「ああそういえばいい忘れていたね。僕は戦術は門外漢だから作戦域外での電子支援に徹するよ。戦略は練らせてもらうけどね。隠蔽に今後のC共和国での商売、兵站の構築、やるのが山積みだからね。だから現地部隊の指揮はアリシア、君にお願いしたいと思うよ」

「私？あらまあ……」

間拔けな顔をして天を仰ぐ。

つくづく面倒事に巻き込まれる。

私は指揮官肌じゃないのよ。

「私も賛成だ。アリシアの指示なら信頼できる」

「紅まで……」

頭を戻し、煙草をひと吸い。

…よし、仕方がない。やりましょう。

「わかったわ。じゃあメンバーの選抜もこつちでするわよ。四個分隊構成の一個小隊、

32名か…資料頂戴」

レスターから資料を受け取り目を通し始める。

まあこの資料に載っていない人も数名連れて行こうと思うのだけど。

「メンバーはいいとして、車両構成はどうする？頭数が絶対的に少ない以上、戦術と練度、装備の質で補うしかないじゃないさ」

「そうねえ。MG付きのSUV4台。通信指揮車1台、セダン2台、LAVI1台かしら。もちろん全部防弾で」

「了解した。それは僕の方で手配しよう。まあ詳しいすり合わせはOmerとの調整次第だね」

「装備はどうする?」

「各車両にRPG本体と弾頭4つは積みたいわね。個人装備は任せるわ。ああそれから」

時刻はすでに2100を回っている。

今日は長い夜になりそうだ。